〔書　評〕

彦坂佳宣著『尾張近辺を主とする近世期方言の研究』

諸星美智直

一

尾張の近世史については夥しく伝存する古文書によって解明が進んでいるが、それに対して、この地方で使用された言語の実態については、資料の制約から殆ど未開拓の分野であった。ただし、上方と江戸以外の地域としては尾張は口語資料に恵まれているとも言える。これまで、吉沢義則・青木辰治・尾崎久弥の諸氏による口語資料の発掘紹介を経て芥子川律治氏による本格的な近世の名古屋方言の研究へと発展してきた。これら先人による研究の蓄積を踏まえて近世尾張の方言を、「中央語である上方語の裾野に位置する方言ととらえて、言語地理学的な視点もまじえた風通しのよい近世期方言の論を目指し」(八頁)て登場したのが彦坂佳宣氏による本書である。

二

本書の構成は以下の通りである。

序　章　研究の視点と方法
第一部　資料論
　はじめに
　1　尾張とその周辺地域の資料構造
　2　方言資料としての尾張戯作類
　3　説教記録『お経様』
　4　雑俳資料――濃尾・三河狂俳を中心に――
第二部　尾張近辺を主とする近世期方言の諸相
　一　音韻
　1　ハ行子音の音価
　2　セ・ゼの音価
　3　合拗音クヮ・グヮ
　4　尾張近辺のオ段長音の開合をめぐって――特有語形の検討から――
　(付論)連母音の融合現象
　二　音便

はじめに
1　形容詞連用形の音便
2　ハ行四段動詞の音便
3　サ行四段動詞イ音便
4　マ・バ行四段動詞の音便
5　音便のまとめ
三　活用
はじめに
1　二段活用の一段化
2　使役の助動詞の活用
3　ラ行下二段敬語辞の活用
4　サ変動詞の活用
5　ナ行変格活用をめぐる問題
6　東西方言の差異にかかわる個別動詞の類
四　表現法
1　原因・理由表現
2　断定表現
3　推量・意志の表現
五　待遇表現
はじめに
1　尾張方言の対称代名詞と尊敬語述部による待遇表現体系
2　中央語との比較から見た尾張方言の敬語の位置
3　文末詞とその待遇的側面
終章　近世語における近畿・東海近辺の方言景観
あとがき
索引

すなわち、文献資料に対する精密な検討と、それを踏まえた近世期方言の体系的な記述考察を以て構成されており、天下の名城名古屋城にも比肩し得る近世語研究史上の金字塔であると言っても過言ではない。

三

さて、序章ではまず、研究の立場と範囲が明示してある。すなわち、中央語に対するその周辺の裾野的な方言状況の解明をめざす研究として「かなりの資料が見られる尾張を中心に考察を進め、その近隣の美濃・三河、またやや西部にある伊勢の方言についてもできるだけ触れ」、「近世期における尾張を主とする東海西部地域の方言の地理的展開の模様、そして、これらと上方語との史的交渉という二つの視点の結びあうところに考察の焦点をおいてみたい。」（二頁）とする。考察の手順としては、今日の方言との比較よりも近世の文献資料による考察方法をとることを述べている。研究の視点としては、資料性の差異に配慮しつつ文体や遊里と一般庶民との位相に言及するとまず述べてある。評者が感嘆し且つ不思議に思うのは、尾張という、上方・江戸以外の近世の特定の地域の言語の実態がかくも豊かに体系的に解明されたことであ

る。これは、御三家筆頭極官大納言の家格を有し尾張一国に加えて信濃木曽（無高）・美濃・三河・近江・摂津の飛び地を併せて六十一万九千五百石の大封を領する尾張徳川家の主邑名古屋を擁し、かつ東海道の要衝に位置する当地域が文化的に爛熟していて郷土洒落本等の口語資料の穀倉地帯ともいうべき状況にあったからであろう。さらに吉沢義則・青木辰治・尾崎久弥・芥子川律治の諸氏による資料発掘によって「すでに十分な資料面の用意と発展的な研究」の蓄積があり、その上で彦坂氏によって資料的にも更に充実させると共に語学的に深化したものといえよう。

第一部は「資料論」として「尾張とその周辺地域の資料構造」に言及した上で尾張の戯作類・説教記録『お経様』・雑俳資料について考察を加えている。この内、芥子川氏の著作に言及されていないもので、著者が新たに活用した資料は、『春秋洒士伝』『新織儛意鈔』『春遊南訶一夢』『軽世界四十八手』『南駅夜光之珠』『夢中角庵戯言』と如来教の説教記録であるという（一〇～一二頁）。尾張地方の方言資料群としては、

a洒落本類
b滑稽本類
c方言書などの類
d如来教の説教記録
e主として幕末期以降の雑俳類

の五種類に分類してそれぞれ書名が示してあり（一〇～一二頁）、a洒落本類はさらに、〈甲＝庶民を描く洒落本〉と〈乙＝遊里を描く洒落本〉とに二分し、内部徴証からみて、もっとも尾張方言における庶民層の口語の実情を語るのは、a〈甲＝庶民を描く洒落本〉であるとする（一三頁）。さらに、美濃・三河・信州・伊勢などの尾張周辺の方言資料について若干言及してある。中心的資料である「方言資料としての尾張戯作類」、すなわち、a洒落本類の〈甲〉〈乙〉とb滑稽本類〈丙〉との資料価値を、否定の助動詞・形容詞連用形音便・断定の助動詞・ハ行四段活用連用形音便の東西方言の対立事項、及び、サ行四段活用連用形イ音便・推量・意志の助動詞を中心とする検討を通じて、〈甲〉はよく均質的な資料性を持ち尾張近辺の庶民層の言語的様相を語るのに対して、〈乙〉は遊里を中心とする位相的な面を語るところが強く、〈丙〉は最も資料性が劣るという、戯作資料の構造を指摘している。語法についてはさらに本書第二部の各章で個別的に詳細な検討が加えてある。さらに、従来、芥子川律治氏による紹介のみで国語資料としての検討が殆どなされなかった文化度に始まる如来教の教祖きのの説教を記録した『お経様』を取り上げ、音韻・音便・語法・敬語・文末詞・語彙から日常会話における豊かな尾張方言の側面と、形容詞連用形音便・ハ行四段活用音便・サ行イ音便等から説教記録という性格による文体的位相の面とを概観している。また、やはり国語資料として扱われることの少なかった濃尾・三河の雑俳資料を取り上げ、音韻・語法・待遇表現の検討から庶民の日常的な口語の特色を指摘し、さらに、ほぼ幕末三十年間の資料から（サ）ッセル・デヤ等の代表的な文法事項について、句に添えられた地名

の所在を探って「言語地理学で言うほどに厳密な条件を設定して出来たものではないが、地理的な広がりを含む分布研究を可能にする」分布図（八三頁）が掲げてあるのは雑俳資料ならではの特質を利用した非常に興味深い試みである。

四

第二部「尾張近辺を中心とする近世期方言の諸相」では、音韻・音便・活用・表現法・待遇表現にわたって検討を加えている。

まず、「音韻」については、いずれも国語音韻史上、殊に中世・近世の実態の解明が甚だ興味を引く重要な項目を取り上げて論じているが、しかし、このうちの1ハ行子音の音価と2セ・ゼの音価とは、本書にも言及する伊勢の大黒屋幸太夫の記録に匹敵するような外国資料等で尾張の実態を反映する音韻資料に遭遇しない限り、本文やルビの仮名表記による傍証のみでは立証することはもとより限界があるのはやむを得ない。一方、3の合拗音クヮ・グヮと4のオ段長音の開合とに関しては、精密且つ明解な論を展開している。合拗音については尾張を中心に上方から三河まで広く用例や証拠を博捜して地理的にも鮮やかな手際で考察している。オ段長音の開合については、この区別が近世後期の尾張にも存在したとする芥子川律治氏等の説に対して、彦坂氏は、推量・意志表現、形容詞連用形ウ音便を中心に再検討を加え、尾張近辺を含めた東国での開合の一般的な混乱は早く、「ウズ類の個別的な変化によるものであり、開合の問題は間接的な関与にとどまるもの」であることを明らかにしている。なお、尾張の音韻といえば評者の如き素人は、すぐに現代の当地域における連母音の融合現象を思い浮かべて、その近世における実態の解明を嘱望するところではあるが、近世における用例は少ないらしく、さすがの彦坂氏をしても「付論」として新たな用例を掲げるに止まり、「しかし、用例そのものの確実さの吟味や分布の広がりについては、多くを語ることが出来ない。」（一二六頁）という。

「音便」については、明治期の『口語法調査報告書』との重複を避け、雑俳資料の援用によって、東西方言の対立事項である1形容詞連用形ウ音便使用の東端を東美濃・西三河（一二九頁）、2ハ行四段動詞連用形促音便使用の西端を西美濃（一三二頁）と推定し、位相面からの検討も加えている。とりわけ紙幅を割いて詳述するのは京都語において中世に盛行しながら中世には衰退した3サ行四段動詞イ音便の近世尾張における盛行についてである。すなわち、〈甲〉〈乙〉資料、および説教記録『お経様』における用例の調査から、「尾張の庶民層にはサ行イ音便が相当に盛んであったこと」（一四二頁）を明らかにし、さらにこれが中世京都語の影響だけではなく敬語動詞・使役助動詞など方言独自に拡張・変容させた面を持つことを指摘し、さらに伊勢・濃尾・三河などの近世資料に拠る地理的広がり、教導的性格による位相面の考察は非常に有益である。

「活用」に関する考察のうち、1二段活用の一段化について論ずる中で、「二段活用は、ほとんど特定の使役的動詞、尊敬の助動詞、

丁寧語「ます」などの付属語に限られる傾向にある。」（一五五頁）として「よみまする」「有ふずる」の例を掲げて「同じ語は一段活用でも現れる。」（一五五頁）とあるが、「まする」「うずる」まで一段化の研究対象とすることについて評者は疑問を感ずる。2使役の助動詞の活用については、「上方語・伊勢方言などの四段型の盛行に対して、尾張近辺は、多少の四段的な活用はあるものの、やはり一段式が優勢であり、西部地域の方言類と対照的な様相」（一六四頁）であることを解明している。ただし、一六〇頁で表2に「使役の助動詞の活用（『お経様』）」と題しながら本文に「ここではサ行の他動詞形も、参考までに加えてある。」とするが、表2において助動詞と動詞の用例数は区別した方がより厳密を期すことができるのではないかと思う。一方、これに続いて、3「させらるる」「召さるる」「遣わさるる」「下さるる」「なさるる」など、動詞に敬語助動詞「(ら)るる」が付いて一語化した尊敬語を筆者は「ラ行二段敬語辞」と呼び、「尾張近辺の下一段式がかなり際だつ存在であること」（一七五頁）を明らかにし、また、4サ変動詞は近世の尾張では終止連体形に多数のセル形が見られる「下一段式サ変動詞」に変容を遂げたことを指摘し、その分布、変容の要因、位相について近世資料を駆使して興味深い考察を加えている。さらに、5ナ変動詞の四段化は上方語においては位相による遅速はあるが全体として天保度以降と遅いのに対して、尾張近辺のナ変動詞は近世後期の時点ですでに四段化が完了していたと推測されることから、「活用」部における考察を併せて、「濃尾周辺地方での活用体系そのものの変容がかなり早かったと考えるのが適当であろう。」（二〇六頁）と指摘する。従来は中央語における活用形式の変遷しか解明されていなかったのであるからこれら研究の成果は頗る大きなものがあるといえよう。なお、6東西方言の差異に関わる個別の動詞についても、尾張周辺における「借りる」（一段）「足る」（四段）等の貴重な用例を掲げて分布を考察している。

「表現法」については、かなりの紙幅を割いて詳述している。まず、1原因・理由表現は、尾張での一般的な形式はデ・ニであり、遊里などの位相にはニヨッテ・サカイ・ホドニ等が使用された実態を示し、各形式の表現性、および位相・分布・歴史が考察されている。なお、術語として「順接」に対して「逆説」を用いるが（二二二〜二二三頁）、巻末の索引では「逆接のニ」とあるので、統一が望まれる。2断定表現は、芥子川律治氏による研究を踏まえて、さらに新たに参照可能になった尾張郷土本戯作と説教記録の調査から「尾張の一般的な様相はデャを主とし、臨時的ともみえるダもわずかにあり、これに対して、ジャは上方的な人物にかたより用いられることがある」（二四二頁）、さらに、「地理的な視点からは、上方・伊勢のジャに、濃尾から三河にかけてのデャ、また三河には確実なダ」（二五七頁）も混じりつつあったと指摘し、位相・文体の面からの考察も加えていて著者の視野の広さに感服した。ただし、知多地方におけるダの使用に関して、二五四頁の表1末尾の注＊1と＊2とは逆で、＊1が『軽世界四十八手』、＊2が『駅客娼穿』におけるダの用例についての注ではなかろうか。

従って二五四頁一二行目の「Cの二作品のダは特定の一人物であり（このうち『軽世界四十八手』のダは知多の客で三河でのダを示す可能性がある）」、および一八行目の記述は、両資料を混同しているようである。そうでないと、二四六頁一七行目の記述と矛盾することになる。因みに評者は『軽世界四十八手』でダを多用する連の客算蔵は二本差（洒落本大成一八巻三五四頁）の「歩師」（三五六頁）で「江戸ニ一弐年も居候がムントひつこぬきのはたにて」（三五四頁）とあるので藩名は明示しないものの江戸勤番経験のある尾張藩士を想起させる人物設定であり、尾張領へ戻っても江戸語のダを使用する姿を描写しようとしたものと解釈している。3推量・意志の表現は、まず、中世京都語で多用されたウズ類と今日にも続くウ（ヨウ）類の二類と稀少例の推量専用のラ類が近世尾張近辺に見られることを示し、位相面の「一般庶民層ではウズ類がかなり保持され、遊里などの新しいあるいは接客的な物言いをしがちな層ではウ（ヨウ）類を多用する傾向」（二六四頁）や、二類の用法差・ウズの分布について考察する。さらに、従来江戸語を対象として研究されてきた明和度にきざす意志・推量の分化の問題の尾張近辺における傾向についての考察がなされ、推量専用形はウズ類は弱く、ウ（ヨウ）類は専用形化しやすい活用語（デアロウ・デャアロウ等）でのみ見られる傾向を指摘し、ウ（ヨウ）類で共通する上方語（洒落本）・伊勢方言（雑俳）の調査結果と比較して近畿外辺にあたる「尾張近辺の古態性と新たな形式との重層した模様」（二九三頁）を解明している。

五

「待遇表現」については、まず、1「尾張方言の対称代名詞と尊敬語述部による待遇表現体系」で、江戸・上方における待遇表現体系に関しては、すでに山崎久之・小島俊夫の両氏による研究があり、本書においてもその研究法を参考にしているが、本書ではさらに主述の対応関係を一線を以て頻度を図示する工夫が加えてある（三〇二頁）。そして、一般庶民層を描く洒落本作品個々の検討を踏まえて、「あなた—お…なされる、なさる、（遊ばす）」「おまへさん—遊ばす、お…なされる、なされる」が対応する第一段階から、「うぬ—やがる、…おる」が対応する第六段階までの六段階が示してあり（三一四頁）、これは、上方・江戸以外の特定の一地域における待遇体系が解明されたものであるだけに非常に有意義な研究である。但し、「「あなた」に対応する「遊ばす」は用例が見えないが、待遇価値から見て「おまへさん」と同等以上であり、その可能性が考えられるので加えた。」（同頁）とあるが、待遇体系を立証する際には用例の無いものは欠いたままにしておくべきであり、「可能性」だけで加えてよいのであろうか。さらに、「まず階層を上中下に分け、発言の位置関係を対等・対上位・対下位に分け、発言の態度を丁寧か普通か直接的かに分け、発言の態度を親疎に分ける、以上4つの面を設定してみる。これらは待遇事象を記述する基本的な事柄として用例の検討以前に予測されるものではあるが、また用例説明の過程で随時ふれたとおり、実例の帰

納的な検討の結果としても必要な事柄と考えられる。」(三一六頁)とする見地から尾張の待遇表現の体系を、「左側の縦に待遇順の形式をとり、右側には3つの階層をとり、左側の語形と関連する枠に上下・対等の関係を矢印の方向で示」している(三一七頁)。但し、「うぬ」「おのれ」の段階については「「六」は実例がないので矢印を入れなかったが、仮に使用されたとすれば当然、卑下の意味となることが分かる。」(三一七～三一八頁)とあるが、これも、使用例がないのに断言してよいのであろうか。気になるところである。また、個々の待遇語彙の位相的側面の細部に言及するなかで、三二七頁の『軽世界四十八手』における「貴公」の用例は「客の謝罪の口上」として掲げるが、評者はこれについては別の解釈をしたい。これはむしろ、武家客同士の説得の場面における用例と解すべきではなかろうか。さらに彦坂氏はこれをB群の「文脈からわざとらしい表現と感じられるもの」(二九九頁)として「尾張方言のなかに入れないのがよいと思う。」(三二八頁)とするが、尾張における武家社会の言語生活の一端がそのまま拾える貴重な場面ではないかと思う。

続く2「中央語との比較から見た尾張方言の敬語の位置」では上方語及び伊勢方言と比較して対称代名詞・述部尊敬語補助動詞の相対的な性格の検討がなされ、上方雑俳の分析も加えて、「つまり、どうやら尾張においては遊里が新たな上方語の受容口であり庶民側はこれに対して方言的な形式は、ゴザルなどの時代的にやや古い形式がなお保有され、あるいは(サ)ッセル・ナサレルなど方言的変容をとげたものである。この見方は、常識的にも、遊里に新しい形式が使用されやすいという近世語の傾向と一致する。」(三五五頁)などの指摘がなされ、「遊バス」「ナサレル／ナサル・ナハル・ナンス」「オ＋一段式」「(サ)ンス／テ＋指定辞」「(サ)ッセル／(サ)ッシャル」についての興味深い考察がなされている。但し、

○(ヤ)ンス・(ラ)レル

この類は、上方語での成立は言うまでもなく早い。尾張では、その受容期の早さを反映してか、よく一般に定着している。(ヤ)ンスなどは、資料の限りでは多用されているとも思えないが、実生活では低い敬意として気楽に使用されたものではなかろうか。(三五九頁)

とあるのは、両者を一括した記述ではあるが、三三五頁における、

「(ら)れる」

例は少ないが、親愛的な表現としていくつか見られた。あったことは確実として、使用上の特色などはよく分からない。

とする記述と整合性を欠くように思われるがいかがであろうか。江戸の戯作に使用例の少ない「ラレ敬語」は近代語研究で注目される項目の一つであるだけに今後の引用のためにも尾張における実態について「定着」なのか「少ない」のか、明確に記述していただくと後学としては引用し易いと思われる。

3「文末詞とその待遇的側面」では、「文頭にあって呼びかけや感嘆を表したり、文末にあって念押しや訴えなどを表出」する(三

六一頁）「文末詞」の尾張における実態を、①文頭にあり呼びかけ機能をもつものと、②文中・文末を主とするものとに分類して記述して尾張における「申し」類（モウシ・モシ）の盛行を指摘した上で、「ナモシ・エモシ」類・「ナンシ・ナモ・エン」類・「ナ・ナー」・「ノ・ノー」・「エ・ワナ・ゾ・イ」・「ゾヨ・ヨ・ゾエ」・「コウ・ヤイ」などの待遇価値について上層・中層・下層の使用者を考慮に入れて体系を示している。これをさらに美濃北西部（能郷猿楽狂言詞章）・伊勢（雑俳）・上方の近世資料との比較から、相対的に文末詞の出方の低い上方語がモシ類・ナ類が優勢であるのに対して「尾張ではナモ類などのモウシの複合形・ノ類の多さがきわだつ」（三八八頁）ことを鮮やかに解明しており、近世期方言の視野を大きく拡げたのも尾張周辺地域の近世語資料の収集に意を用いてきた著者彦坂氏にして初めてなし得る成果であろう。なお、本書では伊勢方言の資料としては雑俳を主としているが、著者には別に『桑名日記』を扱った「国語学」一三九集所収の名論文があり、評者の常に愛読する所であるが本書で同資料に殆ど言及しないのは不思議である。あるいは今後別に計画があるのであろうか、こちらも渇望久しい思いがする。

本書が近世語研究史上に不朽の価値を有する名著であることは言を俟たない。精読し大いに学ばせていただいた。ただ、書評の常で、ほんの些細な瑕瑾に若干言及したが、評者の力量不足による誤読のところもあろうと思う。稚拙な書評で本書に対する敬仰の念が充分に述べられたかどうかやや心許ないが非礼の段は著者の寛容を乞う次第である。

（一九九七年三月三一日発行　和泉書院刊　A5判　四一六ページ　本体価格一五〇〇〇円）

――国学院大学教授――

（二〇〇一年四月二日　受理）